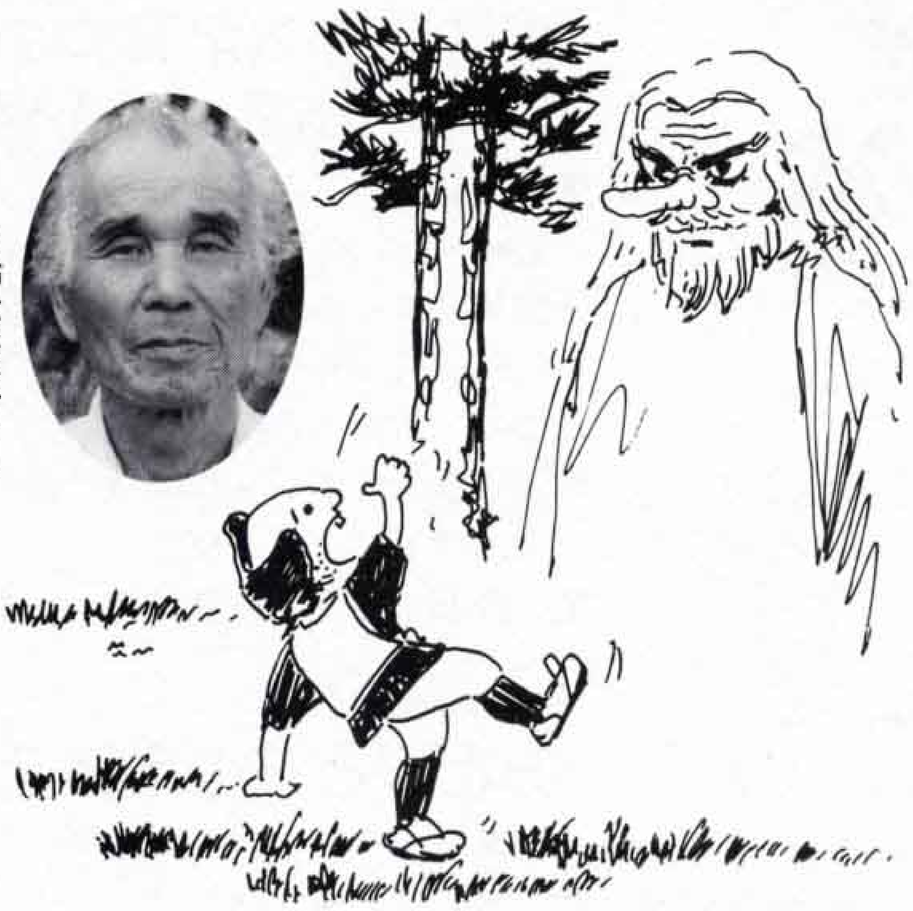
ふるさとの昔話

清勇橋の川天狗

須津地区の赤渕川と沼川の合流点付近を清勇（青柳ともいう）といい、昔は、うつそうとしたところでした。今回は、ここに伝わる川天狗のお話です。



▷鈴木康正さん

おい、魚をくれ

ある夏の、今にも雨が落ちてきそうな暗い晩のことです。虎さんは清勇に釣りに来ました。

「よく釣れるな」といっぱいになったびくを下げて、虎さんは帰り支度を始めました。

すると、後ろから「おい、魚をくれ」という声がしました。振り返ってみると、すぐ後ろに恐しい顔をした川天狗がいました。

ほう、こんな顔かい

びっくりした虎さんは、びくを抱えて一目散に逃げ出しました。

すると向こうから、ほおかぶりをした隣の金さんがやって来ました。「どうした？そんなに息を切らして」「川…川天狗が出たんだ。それがなあ、物すごいんだ」「ほう、こんな顔かい」といいながらほおかぶりをとって、虎さんの顔をのぞき込みました。それは、恐しい川天狗の顔でした。

「ううーん」と虎さんはその場へ気を失って倒れてしまいました。虎さんの帰りがあまりに遅いので近所の人たちが捜しにやってきて、空つぽのびくを大切そうに抱え土手の上で気を失っている虎さんを見つけました。

今は面影がないね

川尻二丁目の鈴木康正さん（七十七歳）は「清勇には大きな松があり、そりゃもううつそうとしていたよ。きつねやかっぱ、天狗などにばかされた話はたくさん伝わっているね。今では面影がないのが寂しいよ」と語ってくれました。

△「昔はこの辺に清勇橋があったよ」

地名の由来

平家越（今泉地区）

治承四年（一八〇年）十月二十日、源氏と平氏の大軍が富士川を挟んで対陣しました。

その真夜中、甲斐源氏武田信義の二万の軍勢が、この付近でひそかに行動を起こしました。

このとき、平氏は、葦の葉に眠っていた数え知れない水鳥が驚いて飛び立った羽音を、敵の夜襲と間違えて一目散に京都へ逃げ帰ったので、平家越という地名になったといいます。

新市二十周年記念　七月の行事

☆みどりと花の市民会議　二十日　富士文化センター　☆若人の祭典ヤングフェスタふじ20　二十日　富士川緑地公園　☆富士まつり　二十六日・二十七日　市役所前大通りほか　☆ママさんバレーボール大会　二十七日　勤労者体育センター

新たな創造
確かな発展
ーはたちの富士市ー

富士のあゆみ ⑭

浮島沼の開発

▷吉原三中前の野村一郎の碑

江戸時代には、浮島沼の新田開発が盛んになりました。

嘉永３年（1850年）大野新田の高橋勇吉は、大野・桧・田中の３新田を水害から守るため天文堀をつくりました。

天文堀は、悪水を沼川に排水するためのもので、費用はほとんど勇吉の自費でした。

慶応３年（1867年）比奈村の名主野村一郎は、海水から田畑を守るため吉原湊に大変頑丈な防潮堤をつくりました。しかし、２年後の明治２年８月の高波により崩れ去ってしまいました。

原宿の増田平四郎は、現在の昭和放水路と同じ場所に排水路を計画しました。慶応元年（1865年）18回もの許可願いにより幕府から許可がおり、身延山から１万両の出資を受けて着手しました。明治２年完成しましたが、やはり８月の高波で破壊されてしまいました。

こちら編集室

広報紙づくりのプロを自認する編集室にとって一番恥ずかしいのが誤字脱字。毎号、複数の目で最低三回は校正しますが、たまに背筋の寒くなるようなときがあります。

六月五日号では、「六月の当直医」とすべきを「四月の当直医」となっていました。深くおわびして訂正します。

発行・富士市役所　富士市永田町１丁目100番地　☎51－0123　人口　217,474人　男　108,054人　女　109,420人
編集・総務部広報広聴課　世帯数　62,108世帯　（６月１日現在）